

ナウマンの四国地方調査ルート（山田，2011） の修正—原（2012）への回答—

山田 直利¹

1. はじめに

私は以前本誌に掲載した「予察地質図シリーズの紹介 その1～その5」（山田，2008，2009，2010，2011，2012）において，近代日本地質学創生期に縮尺40万分の1「大日本帝国予察地質図」（5葉）の出版が果たした先駆的な役割を明らかにし，とくに，これら地質図作成に貢献した先達たちの調査の足跡を個別，具体的に示すことに努めた。

山田（2011）は，「予察西部地域」（中国－四国地方）における1870年代～1880年代前半の地質研究を概括した中で，ナウマンによる四国地方の調査が以下の4ルートに沿って行われたと推定した。

「1883年には，……岡山からは瀬戸内海を巡り，四国へ渡って，今治－西条－別子－吉野川－領石－高知ルート（本記事でAルートと仮称，以下同様）を踏査した（ナウマン，1885，1890）。1884年には高知に上陸して，領石－佐川－宇和島－松山ルート（Bルート）を踏査した。1885年には，川之江－川口－吉野川〔小歩危・大歩危〕－領石ルート（Cルート）で四国を横断した。また上記の旅行とは別の時期に，徳島から勝浦川・那賀川一帯（Dルート）も踏査した（ナウマン，1890）」。

2. 原 郁夫の意見

原（2012）は，「三波川帯地域地質学の黎明期」の第1章第1節「ナウマンが歩いた四国三波川帯」において，山田（2011）の「ナウマンの四国地方調査ルート」には多くの問題点があることを指摘し，それに関連して，おおよそ以下のような意見を述べた。

Aルートについて，ナウマンは別子から直接吉野川上流部へ向かったのではなく，銅山川を下り，新宮→馬立川→笹峰峠→立川上名→八丁山→行川のルートで吉野川に達したらしい。

Bルートについて，ナウマンの論文からは宇和島と松山の間のルートを正確な地名で指定できないが，一般的な

ルートとして「宇和島→吉田→卯之町→大洲→内子→中山→佐礼谷→郡中→松山」であった可能性が高い。

Cルートについて，ナウマンは川之江から直接川口に向かったのではなく，川之江から讃岐山脈を横断して吉野川に着き，吉野川を川口まで遡り，川口→大歩危・小歩危→穴内川→根曳峠→天行寺村→領石→高知というルートで調査したらしい。

Dルートについて，ナウマンは勝浦川・鮎喰川一帯に止まらず，西方へ，剣山を越えて祖谷川を下ったのであろう。徳島→那賀川→鶴峠→勝浦川（盆地一帯）→梅ノ木峠→鮎喰川→焼山寺山→鮎喰川→川井峠→穴吹川→見ノ越峠→剣山→祖谷川→一字→大歩危（吉野川）というルートが想定される。

3. ナウマンの高知上陸を巡って

原（2012）はまた，第1章第1節の「おわりに」で，山田（2011）のBルートの説明の冒頭に「高知に上陸して」とあるのを疑問視し，その根拠が示されていないことを指摘した。

これに対して私は，ナウマン（1890，289ページ，左段）が，「汽船は，物部川の西の，岸近くに位置している丘と山の間隙を目指して進む。狭くて危険な入口を通過すると，船は山々に囲まれた内湾〔浦戸湾〕へとわれわれを運び込む。……湾は狭くくびれ，その奥には広い水道があり，その先で間もなく土佐の中心である高知に達する。その先端にはカガミガワすなわち鏡の川〔鏡川〕が注ぎ，そこに大きく華やかな首都の家並が広がっている。」と書いていることから，ナウマン自身も「われわれ」の一人として航路にて高知の市街地に上陸したものと考えたのであった。上陸後ナウマンは浦戸湾北西の臺ヶ森（現烏帽子山）に登り，北方に広がる山地・平野の魅力的な眺めを楽しんでいる（ナウマン，1890，p. 289，左段－右段）。

ナウマン（1890，p. 290，左段）はまた，「高知湾への入り口から西へ上陸するとすぐに，先に述べた中生層〔臺ヶ山〕の平らな波状の丘陵地が存在する。」と書いており，浦

¹ 地質調査所（現産業技術総合研究所 地質調査総合センター）元所員

キーワード：E. ナウマン，四国地方，原 郁夫，山田直利

戸湾の湾口付近で下船した可能性があることを示唆している。

以上のように、ナウマンが1回あるいは2回、航路で高知に上陸したことは確かであろう。ただし、その根拠を示さなかったことは私の誤りであった。なお、この航路はナウマン(1887)の日本旅行ルート図には載っていないが、このルート図の発表されたのは四国の詳細な地形・地質が記載された本論文(ナウマン, 1890)よりも3年も早く、そのため高知航路が見落とされた可能性も考えられる。

4. 今回の修正

以上のような原(2012)の指摘に応じて、私は、基本的には原(2012)の意見を受け入れ、一部は私の考えに基づいて、ナウマンの四国地方調査ルート(山田, 2011, p. 10, 右段)を、今回、以下のように修正する(アンダーラインは修正箇所を示す)。

A ルートを「今治 - 西条 - 別子 - 銅山川 - 新宮 - 馬立川 - 笹峰峠 - 立川上名 - 八丁山 - 行川 - 吉野川 - 領石 - 高知」に修正する。

B ルートの説明の前に、「高知に上陸して(ナウマン, 1890, p. 289-290)」を入れる。宇和島 - 松山間については、ナウマンの調査記録はみつからないので、原文のままとする。

C ルートを「川之江 - 讃岐山脈 - 吉野川 - 川口 - 大歩危・小歩危 - 穴内川 - 根曳峠 - 天行寺村 - 領石 - 高知」に修正する。

D ルートについては、「徳島から勝浦川・那賀川一帯も調査した」の文を削除し、「また上記の旅行とは別の時期に、徳島 - 那賀川 - 鶴峠 - 勝浦川(盆地一帯) - 梅ノ木峠 - 鮎喰川 - 焼山寺山 - 鮎喰川 - 川井峠 - 穴吹川 - 見ノ越峠 - 剣山 - 祖谷川 - 一字 - 大歩危(吉野川)というルートで調査したらしい(ナウマン, 1890)」に変える。

謝辞: 広島大学名誉教授の原 郁夫氏は山田(2011)の「ナウマンの四国調査ルート」を詳細に検討して、その問題点を指摘された。同氏に深く感謝し、あわせて、今回の修正記事の発表が予定よりも10年余り遅れてしまったことを、お詫び申し上げる。科学史家の矢島道子氏からはナウマンの「四国山地の地質」の原論文のコピーをいただき、本記事執筆の参考にすることができた。同氏に厚くお礼申し上げます。

文 献

- 原 郁夫(2012)三波川帯地域地質学の黎明期. 原 郁夫, 非売品, 58p.
- ナウマン, E.(1885)日本群島の構造と起源について(独文). 山下 昇訳(1996), 日本地質の探求—ナウマン論文集—, 東海大学出版会, 東京, 167-222.
- ナウマン, E.(1887)日本の自然地理および日本人についての短評(英文). 山下 昇訳(1996), 日本地質の探求—ナウマン論文集—, 東海大学出版会, 東京, 261-276.
- ナウマン, E.(1890)四国山地の地質(独文). 山下 昇訳(1996), 日本地質の探求—ナウマン論文集—, 東海大学出版会, 東京, 285-312.
- 山田直利(2008)ナウマンの「予察東北部地質図」—予察地質図シリーズの紹介 その1—. 地質ニュース, no. 652, 31-40.
- 山田直利(2009)原田豊吉編「予察東部地質図」—予察地質図シリーズの紹介 その2—. 地質ニュース, no. 660, 32-47.
- 山田直利(2010)原田豊吉編「予察中部地質図」—予察地質図の紹介 その3—. 地質ニュース, no. 668, 15-28.
- 山田直利(2011)巨智部忠承ほか7名の「予察西部地質図」—予察地質図の紹介 その4—. 地質ニュース, no. 679, 8-22.
- 山田直利(2012)最古の九州 - 西中国地方地質図—「大日本帝国予察西南部地質図(巨智部ほか, 1895)の紹介—. GSJ 地質ニュース, 1, 40-57.

YAMADA Naotoshi (2026) A revision of "Naumann's survey routes in Shikoku" (Yamada, 2011) in reply to Hara (2012).

(受付: 2026 年 3 月 18 日)